

仏語科教育法履修者の抱える問題点とその改善

—発音と初級文法の観点から—

Quelques problèmes qu'ont les étudiants du cours de la méthode
d'enseignement du français et son amélioration

—Au point de vue de la prononciation et de la grammaire élémentaire—

荒川 久美子*

ARAKAWA Kumiko

はじめに

日本語を教えているフランスの高校とフランス語を教えている日本の高校の交流を構成し組織立てることを目的とする日仏高等学校ネットワーク(コリブリ)によれば、日本では約150の高校でおよそ1万人の高校生にフランス語教育が行われているとのことである⁽¹⁾。一方、文部科学省がまとめた「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」では「英語以外の外国語については、改定前と同様に、地域の実情や学校の実態に応じ、一層積極的に開設され弾力的な指導ができるようにするため、学習指導要領において特に規定されていない。」⁽²⁾とされている。したがって、仏語科教育法の場合、授業の目標設定は教員に任される部分が多くならざるを得ない。仏語科教育法を担当させていただくようになって10年たつが、基本的に前期の仏語科教育法Ⅰでは初級文法の指導力をつけることを、後期の仏語科教育法Ⅱ～Ⅳにおいては初級文法の履修を終えた生徒に対し購読の授業を行える指導力をつけることを目標としている。なぜこのような目標設定を行っているかは以下の理由による。

他教科では4年生になってからの実習先は自己開拓により行く場合が多い。しかし、仏語科では多くの場合出身校でフランス語の授業がないため、あるいはあっても非常勤講師の教員がフランス語を教えているとの理由で自己開拓が困難であるのが現状である。最近他校で受け入れていただけるケースもあったが、基本的にはフランス語の授業が開講されている学習院高等科か学習院女子中・高等科に行くことが多い。学習院高等科では高校2年生と高校3年生に対し、各2時間初級の授業が行われている。学習院女子中・高等科では高校1年生に対し週2時間、高校2年生と高校3年生に対しては週4時間授業が行われているがその内訳は以下の通りである。

高校1年生	日本人講師による初級文法の授業	2時間
高校2年生	日本人講師による初級文法の授業	2時間
	フランス人講師と日本人講師による初級会話の授業	各1時間
高校3年生	日本人講師による購読と仏作文の授業	2時間
	フランス人講師と日本人講師による初級会話の授業	各1時間

このことから仏語科教育法を履修し、教育実習に出る学生は、初級文法はもちろん学習

* 学習院大学教職課程非常勤講師

院女子中・高等科に実習に出た場合に、高校3年生に対し講読の授業を行えるだけのフランス語力を持っていることが必要不可欠とされる。しかし学習院女子中・高等科でフランス語を担当している筆者の目から見ると、仏語科教育法履修者と高校3年生のフランス語履修者の実力差は顕著なものではない。そこで授業内で、学習院女子中・高等科の状況を伝え、学生の立場からではなく教員としての立場からフランス語の教科書を見る必要があるということはたびたび伝えているし、個々の模擬授業に対して学力向上のための指摘を行っているが、履修者の抱える問題点をまとめて指摘する機会がないのが現状である。問題点は多くあるが、本稿ではその中でも発音と初級文法の指導における問題点を指摘し、その改善のためにどのような方策を取るべきかを示唆してゆきたい。

1. フランス語の発音(ここではフランス語の発音は便宜上カタカナで表記することとする)

例年仏語科教育法の授業の初回にフランス語の発音やつづり字についての体系的な知識を持っている学生がいるかどうか尋ねているが、ほとんど皆無である。発音については教科書によって最初に発音についてまとめて紹介しているもの、あるいは何回かに分けて紹介しているものと分かれる。いずれにしても教員はどのような状況下でも(発音を教えるための授業を行うにしても、授業中に個別の発音を注意するにしても)生徒に正確な発音を指導できるだけの知識を持たなければならない。そこでここではどのような知識を持つべきなのかとまた仏語科教育法の授業から見える現状について述べ、最後にその改善方法についてまとめたいと考える。

1. 1. フランス語の母音と子音

フランス語の発音を形成する音素としては口腔母音が12音、鼻母音が4音、半母音(半子音)3音、子音17音がある。筆者の経験上、これらについて授業中にまとめて指導するということはない。発音だけ取り上げて教えても、よほどこうしたことに興味のある生徒以外は退屈してしまうし、フランス語の発音は難しいという印象を与え、フランス語離れを助長してしまう可能性もあるからだ。

本稿では個々の音の出し方について踏み込むことはしないが、フランス語の教員を目指す以上は個々の音の発音の仕方について明確にできるだけの知識を持ち、また自分自身でその音を発音できるようにする必要がある。しかし、実際は母音や子音の数や種類を尋ねても即答はできず、また履修者自体の発音が間違っている場合も散見される。

1. 2. つづり字と音の関係

フランス語では通常つづり字と音の関係は密接に結びついている。例えばai, eiは「エ」、ouは「ウ」、au「オ」と読むといった具合である。子音に関しても、ph「フ」、chは「シュ」、gnは「ニュ」と読むと基本的に決まっている。もちろん例外はあるにしてもこの規則を覚えておけば初出の単語を目にした際にもほとんど間違いなく発音できるようになっている。

学生も単語や文章を発音しているときには(時には間違えることはあっても)この規則に則って発音しているのだが、教員がこのフランス語のつづりはどう読むのかと突然尋ねた時にはすぐには答えられないことが多いのが現状である。例えば、Bonjourは「ボンジュール」と発音できるのにouはどのように発音するのかと尋ねると答えられない場合がある。ここから学生がつづり字と発音の関係について体系的に理解していないと推察される。

1. 3. リエゾン、アンシェヌマン、エリジョン

・リエゾン

単独で発音したときには発音されない語末の子音が、次に母音あるいは無音のhで始まる単語が来る時、その母音とともに1つの音として発音される現象。

例) les amis ×「レ アミ」→○「レザミ」

・アンシェヌマン ある単語の語末の子音と次の語の語頭の母音を1つの音として発音すること。

例) il est ×「イル エ」→○「イレ」

・エリジョン je, ce, le, la, queなどの単語の後に母音あるいは無音のhで始まる語が来る時に、語末の母音字が省かれ代わりに´(アポストロフ)をつけること。

例) ×je ai「ジュエ」→j´ ai「ジェ」

以上のようなフランス語の発音上の規則は、初級の時点で学習している項目であるにもかかわらず、明確に説明できる学生は少なく、履修者によっては3つの区別がついていないのが現状である。

1. 4. アクセント、リズムグループ、イントネーション

フランス語では個々の単語にアクセントがある英語とは異なり、基本的には単語レベルでは語末の母音にアクセントが来る。またリズムグループと言われる一つの意味を形成するグループの中ではその最後にアクセントが来るとされている。

また文を発話する際のイントネーションにも次のような規則が見られる。平叙文では、文中の語群の終わりにイントネーションが上昇し、文の最後でイントネーションが下降する。疑問文では文の最後でもイントネーションが上昇する。

履修者に模擬授業を行わせている際に起きる個々の発音の間違いはつづり字と音の関係を知らないことに起因すると思われる。また文中でもイントネーションが下がってしまう履修者が多くみられる。これは今の段階では検証までには至っておらず推測の域を出ないのであるが、フランス語の発音と意味が結びついておらず、イントネーションに注意を払えない、あるいはリズムグループではないところにポーズを置くなどの読み方をしてしまうのではないかと考えられる。

1. 5. まとめ

発音については以上のような問題点が見られる。もちろん言及しようと思えば、際限がなく指摘すべき点があるが、フランス語の初級の教科書の中にある発音関係の記載を鑑み、また正確なフランス語の発音を指導するためには最低限上記のことは理解している必要がある。この中で、リエゾン、アンシェヌマン、エリジョンに関しては履修者が教科書や参考書などを参照すれば、理解でき、生徒にも説明できることである。またつづり字と音の関係も独学での学習が可能であると考えられる。それに対して、個々のフランス語の音の発音は独学では難しい。今の大学のカリキュラムの中では、発音に特化した講義がないので、場合によっては、外部のフランス語の学校の発音クラスで正しいフランス語の発音の仕方の指導を受ける必要もあるであろう。

2. 初級文法

2. 1. 教材選択

初級文法の問題点に入る前に、教材の選択はどのように行われるのかを述べる。

「クラスのニーズ、興味、レベル、人数、時間数などはそれぞれに異なりますので教師がクラスに適した教材を使用しようとするれば、クラスの数と同じだけの教材が作成されねばならないでしょう。確かに、個々の条件の差異を考慮して、そのクラスに合った教材を作ることが理想ですが、教材作成にはかなりの時間と労力が必要であり、すべての教師が作れるわけではありません。そのため市販の既成教材を利用することがどうしても多くなります。」⁽³⁾

フランス語では学習指導要領が特に規定されていないため以上の記述のように、教科書の選択も各学校のカリキュラムや目標に合わせてフランス語教員が選択するのが一般的である。仏語科教育法の履修者が初級文法の模擬授業を行う場合にも教科書の選定から始め、それに沿って教案を立て授業を実施してもらっている。しかしその際に履修者が陥りやすいのは、教えるべき文法項目の全体像をとらえずに、教科書に書かれていることのみを教えようとすることである。しかし、必要なのは教科書を教えることではなく、対象とする文法項目を教えることであり、そのための教材研究が必要となる。今回はその例として2つ見てゆく。

2. 2. 教材研究の実際（以下の例文の訳は筆者による）

・例1

関係代名詞

- qui 先行詞は関係節の主語（人でも物でもよい）
C'est un acteur qui est très populaire en ce moment en France.
（この人は今フランスでとても人気のある俳優だ。）
- que 先行詞は関係節の直接補語（人でも物でもよい）
J'aime beaucoup le rôle qu'il a joué dans ce film.
（私は彼がこの映画で演じた役が大好きだ。）
- dont de + 先行詞を受ける
C'est une actrice dont la mère était aussi actrice.
（この人は母親も女優であった女優だ。）
- où 先行詞は場所または時を表す語
Quel est le cinéma où on passe « Cyrano de Bergerac » ?
（『シラノ・ド・ベルジュラック』が上映されている映画館はどれですか。）
C'est le jour où nous sommes allés au cinéma ensemble.
（それは私たちが一緒に映画館に行った日だ。）⁽⁴⁾

quiの場合、例文は人を先行詞としたものである。この教科書では次ページにExercices（練習問題）があるのだが、その中でも先行詞を人としたもののみである。そこで物を先行詞としたものを紹介したほうが生徒にはより理解しやすいと考えられる。

例) J'aime la robe qui est dans la vitrine. ⁽⁵⁾

(私はショーウィンドウにあるドレスが好きです。)

queの場合は、関係代名詞queとしながら、実際にはqu' (queのエリジョンした形) が紹介されている。この場合にも元の形であるqueの例を紹介したほうが良いであろう。

例) C'est un acteur que je voulais rencontrer. ⁽⁶⁾ (この人は私が会いたかった俳優です。)

dontの例文として名詞の補語の用法が出ているが、dontには他の用法もみられる。

Où est la femme dont vous avez parlé ? ⁽⁷⁾ (de + 先行詞は動詞の補語)

(あなたが話題にした女性はどこにいますか。)

Voici un élève dont le professeur est très fier. ⁽⁸⁾ (de + 先行詞は形容詞の補語)

(この子は先生がとても誇りに思っている生徒です。)

以上のように、où以外は例文を補足したほうが文法項目としてはまとめ、生徒の理解を促すのでないかと考える。

・例2

疑問代名詞

	主 語	直接補語 / 属詞
人	Qui habite ici ? Qui est-ce qui habite ici ?	Qui cherchez-vous ? / Qui est-ce ? Qui est-ce que vous cherchez ? Tu cherches qui ? / C'est qui ?
物・事	Qu'est-ce qui arrive ?	Que faites-vous ? Qu'est-ce que vous faites ? / Qu'est-ce que c'est ? Tu fais quoi ? / C'est quoi ?

N.B. ・疑問代名詞の前に前置詞を置くことができる。 *Avec qui* travaillez-vous ?

このときqueは強勢形のquoiに変わる。 *De quoi* parlez-vous ? ⁽⁹⁾

他のいくつかの教科書にあたってみたがやはり同様に通常は疑問文のみの例文が記載されている。そして学生がこうしたテキストを扱う場合には、教科書の文例のみの紹介に終始することが多い。しかし疑問代名詞は誰あるいは何について尋ねるものであり、必ずその答えが想定される。そこで逆に答えから疑問文を導き出すという方法も考えられる。以下がその例である。

疑問代名詞

1) 人 / 主語

Qui habite ici ? /

C'est Laurent. (Laurent habite ici.)

Qui est-ce qui habite ici ?

(ロランです。(ロランがここに住んでいます。))

(誰がここに住んでいますか。)

2) 物・事 / 主語

Qu'est-ce qui arrive ?

C'est un accident. (Un accident arrive.)

(何が起こりましたか。)

(事故です。(事故が起こりました。))

3) 人 / 直接補語

Qui cherchez-vous ? Je cherche Mika.
Qui est-ce que vous cherchez ? (私はミカを探しています。)
Tu cherches qui ?
(あなたは(君は)誰を探しているのですか。)

4) 人 / 属詞

Qui est-ce ? / C'est qui ? C'est Mika. / Ce sont mes frères.
(これは誰ですか。) (ミカです。)(私の兄弟です。)

5) 物・事 / 直接補語

Que faites-vous ? Je fais mes devoirs.
Qu'est-ce que vous faites ? (私は私の宿題をしています。)
Tu fais quoi ?
(あなたは(君は)何をしていますのですか。)

6) 物・事 / 属詞

Qu'est-ce que c'est ? / C'est quoi ? C'est un livre. / Ce sont des livres.
(これは何ですか。) (これは本です。)(これらは本です。)

7) 前置詞 + 人

Avec qui travaillez-vous ? Je travaille avec Laurent.
Avec qui est-ce que vous travaillez ? (私はロランと働いています。)
(あなたは誰と働いているのですか。)

8) 前置詞 + 物・事

De quoi est-ce que vous parlez ? Nous parlons de nos examens.
De quoi parlez-vous ? (私たちは私たちの試験について話しています。)
(あなたたちは何について話していますか。)

テキストの右側の下線部が導き出すべき答えであり、左側がそれを問うための疑問文である。このように答えをはじめに紹介して、その答えを導き出すために使う疑問詞とまた疑問詞による構文の違いを紹介するほうが、生徒には理解しやすいのではないかと考えられる。

2. 3. まとめ

例を取った教科書は、筆者も複数校で利用している、あるいは利用したことがあるコンパクトで非常に使いやすいものである。しかし筆者も教科書を編集した経験からわかるが、特に初級向けの教科書では参考書とは異なりすべてを網羅することはできない。また、教科書の筆者側も使用する教員に説明を任せることを想定して教科書を編集している場合も多い。そこである文法項目を教授するために教科書の例文では十分ではないと判断した場合には教員は説明を付け加える必要がある。

しかしながら、履修者を見ていると教科書の枠内で指導することしか考えず、それ以外の用法の説明を加える必要があることに気が付かない。フランス語の教科書の場合は学習

指導要領にのっとった科目とは異なり、多くの場合詳細な教授用資料は存在しない。そこで教員は常に、教科書を教えるのではなく、文法項目を指導するために複数の参考書や教科書を参照しながら、あるいは信頼のおけるネイティブスピーカーに確認を取りながら、どのようにすれば対象とする文法項目を理解させることができるのかを考えて教材研究を進める必要がある。多くの場合は以上で見たように補足をすることが多いと考えられるが、生徒の理解度や教科書の全体の流れを見たとうえで、とりあえず保留にするといった判断が必要になる場合もあるだろう。

おわりに

以上みてきたように、フランス語では学習指導要領で規定されていないため、自由度が高い反面、それだけに教員の力量が問われることとなる。仏語科教授法履修者には、それまでの学生としての学びという視点で教科書を追うことから、教科書を基本としつつも文法項目を生徒に定着させるためにどのように補足していくかを常に判断していく姿勢を持ってほしいと願っている。購読の授業の際にもやはり問題点は見られるが、それは別の機会に扱えればと考えている。

【注記】

- 1) 在日フランス大使館、2015年1月20日、日仏高等学校ネットワーク:コリブリ(COLIBRI)
<http://www.ambafrance-jp.org/article1826>
2017年1月27日取得
- 2) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版株式会社、2011年、p. 7
- 3) 中村啓佑、長谷川富子『フランス語をどのように教えるか』駿河台出版社、1995年、p.167
- 4) 藤田裕二、藤田知子、Sylvie GILLET『新・東京—パリ、初飛行[新装改訂版]』駿河台出版社、2013年、p.44
- 5) 小野ゆり子、村松マリ＝エマニュエル『マ・グラメール』白水社、2011年、p.44
- 6) Jacques Levy, Frank-Arnaud Mehl, 杉本圭子、田原いずみ『くわしく学ぶフランス語の基礎』朝日出版社、2015年、p.56
- 7) 斎藤昌三『《新版》ル・フランセ』白水社、2001年、p.28
- 8) 荒川久美子、吉田加南子『ステキ！なフランス語』白水社、2007年、p.55
- 9) 藤田裕二、藤田知子、Sylvie GILLET『新・東京—パリ、初飛行[新装改訂版]』駿河台出版社、2013年、p.20